

会 議 録

1 会議名

平成 27 年度第 1 回 吹上・釜蓋遺跡調査指導委員会

2 議題（公開・非公開の別）

- (1) 釜蓋遺跡の調査について（公開）
- (2) その他（公開）

3 開催日時

平成 27 年 6 月 29 日（月）午後 1 時 30 分から午後 4 時 00 分まで

4 開催場所

上越市ラーバンセンター 第 4 研修室
発掘調査現場

5 傍聴人の数

3 人

6 非公開の理由

なし

7 出席した者（傍聴人を除く。）氏名（敬称略）

- ・委員 : 岡村道雄（委員長）、橋本博文（副委員長）、五百川裕、卜部厚志、黒野弘靖、小島幸雄
- ・オブザーバー : 滝沢規朗（新潟県教育庁文化行政課副参事）、川村知行（上越市文化財調査審議会委員長）、
- ・事務局 : 教育委員会教 中野教育長
文化行政課 中西課長、浅野副課長、新保係長、羽深主任、草間主任、湯尾主任、溝内主任

8 発言の内容

別紙のとおり

9 問合せ先

教育委員会文化行政課 TEL : 025-545-9269

E-mail : bunkagyousei@city.joetsu.lg.jp

10 その他

別途の会議資料も併せてご覧ください。

平成 27 年度第 1 回 吹上・釜蓋遺跡調査指導委員会

平成 27 年 6 月 29 日（月）午後 1 時 30 分～4 時 00 分

上越市ラーバンセンター 第 4 研修室ほか

1 開会

2 あいさつ 文化行政課長

3 委員長ごあいさつ

○報告

釜蓋遺跡公園・ガイダンスの整備について

事務局

- ・ 資料をもとに、平成 26 年度の整備について説明

○議事（進行：岡村委員長）

(1) 釜蓋遺跡の調査について

事務局

- ・ 平成 27 年 6 月 30 日に刊行予定の『国指定史跡 斐太遺跡群 釜蓋遺跡確認調査概要報告書 2』の報告と、資料をもとに平成 17 年度から 26 年度までの釜蓋遺跡発掘調査の経過について説明。
- ・ 資料をもとに、平成 27 年度前期の発掘調査の状況について説明。
- ・ 釜蓋遺跡現地にて、平成 27 年度前期の発掘調査の状況を説明。

事務局

- ・ 現地にて 2B87・97 グリッドの調査状況を説明。

岡村委員長

- ・ SI1455 の平面の範囲をどのように捉えているのか。

事務局

- ・ 調査区のセクションで SI1455 の南辺・北辺の壁の立ち上がりと部分的に焼土の堆積が確認されており、調査区外の西側へ遺構が広がっている状況である。

岡村委員長

- ・ SI1455 の規模は現状の調査状況で想定可能あるので、まず全体像を理解し、竪穴と周溝の関係を検討してから拡張する必要の有無を決めること。
- ・ SI1455 の規模が想定できれば、竪穴の場所によって埋まり方や焼け方の違いが分かる可能性がある。竪穴にかかって残っているセクションを活用して、堆積状況を確認しなければならない。
- ・ ここは国の史跡なので、できるだけ遺構を全部掘削するということは避けてほしい。最低限の調査量で最大限の効果を上げる必要がある。調査区の拡張を行わずに、現状の調

査範囲で竪穴建物跡の1/2の調査を行っても、十分な情報が得られる。将来に残すという意味では、拡張する必要はない。

- この遺跡では、焼失竪穴建物跡が次々に確認されるのは、焼却処分している可能性がある。この集落が終わる時に焼失している可能性という観点を持ったほうがよい。
- SX1453に炭化物が入っていることから周溝の埋め戻しが考えられる。そのような視点で竪穴プランやそれに伴う周溝をしっかりと捉えたほうがよい。
- 周堤帯は竪穴の半径の規模で造られるので、現在想定している規模と矛盾しない。そういう意味で周堤の有無は確認する必要がある。
- SI1455の内部に調査を集中させるより、まず竪穴と同時期の他の施設を捉えなければならない。

滝沢オブザーバー

- 平成23年度に調査を行ったSI83との比較のためにSI1455の調査を行うことは理解できる。現在の調査状況で竪穴の一边が6mということが分かった。さらに、竪穴建物跡にかかるセクションが残っているので、調査区の拡張ではなくセクションで周堤の有無の確認を行う必要がある。
- 竪穴建物跡内部の1/2の調査を行うのであれば、調査区を拡張して行うのではなく今の調査範囲のまま調査を行うことができる。
- 遺跡の構造把握を目的とした時に、竪穴建物跡以外の建物が本当はないのかどうかを確認する必要がある。
- ピットが直線状に並んでいるように確認できるので、建物跡の可能性のある遺構に関しては調査を行う必要がある。

小島委員

- 竪穴建物跡の構造は1/4の調査で分かる。しかしその周囲に周溝の有無を確認しないと、構造の把握とは言えず、復元の可能性もなくなる。

事務局

- SI1455は北東1/4の調査をまず行うこと、確認されたピットの調査を行うこと、その結果を委員の皆様へ報告した上で、次の方針をご相談させていただきます。
- SI83は壁から離れたところで焼土が確認されていることに対し、SI1455は壁際まで焼土があることの差は何か。

岡村委員長

- 竪穴の周囲には周堤があり、そこに垂木が架けられる。垂木が倒れるときに周堤から跳ね上がり、垂木の根もとが竪穴の上側の向いて残り、焼土も壁際に厚く堆積する。竪穴の削平量が多いと、焼土は竪穴壁から離れて確認される。SI83の焼土は竪穴壁から遠くで確認されたので、削平量が多いという想定ができる。

小島委員

- ・ 竪穴建物跡が掘りこまれているのは基本層所の何層か。

事務局

- ・ VIa 層

小島委員

- ・ 違う。

事務局

- ・ 釜蓋遺跡の確認面はIVb層、しかしこの調査区ではその下のVIa層から確認されており、本来あったIVb層が削平を受けていると考えられるので、周堤が残っているのを確認するのは困難と考えられる。

滝沢オブザーバー

- ・ まずセクションで確認を行い、周堤がないことの所見も重要である。

小島委員

- ・ どうして周堤が削平されてないと言わないのか。III層が二次的な層と言っているのだから、周堤が存在するはずがない。

事務局

- ・ 調査区のセクションの記録を取っており、分層する時も周堤のことは念頭に置いていたが、もう一度セクションの検討をすることとしたい。

事務局

- ・ 現地にて 2C17 グリッドの調査状況を説明。

岡村委員長

- ・ S I 1462 の床面は、セクションで確認できるか。

事務局

- ・ セクションでは壁溝と掘方の覆土が確認でき、掘方まで削平されてしまったと考えている。

橋本副委員長

- ・ SI1462 には火処はないのか。

事務局

- ・ 確認できていない。さらに、柱穴についても確認できていない。

岡村委員長

- ・ SD1456 が環濠と接合するなどの想定はあるか。

事務局

- ・ SD1456 の延長線はこれまでの発掘調査で確認されていないが、調査区西側の 3 号環濠にぶつかることを想定している。それらの新旧関係は不明である。

岡村委員長

- ・ ほかの事例はどうか。

事務局

- ・ これまでの調査では SD48・79 が同じ断面形の溝跡が確認されており、3 号環濠にぶつかっているが、重複関係は明らかでない。

橋本副委員長

- ・ SD48・79 の時期はいつごろか。

事務局

- ・ 新潟シンボ編年の 4・5 期の土器が上層から出土しているが、下層から出土遺物は確認されていない。
- ・ SD1456 のサブトレンチで確認できる基盤層が溝跡にむかって落ち込む状況が見られ、溝を掘ったことにより起きることなのか、もともとの地形なのか教えていただきたい。

小島委員

- ・ 基盤層が溝に向かって下がっている状況は、もともとの地形が沢状のところを利用して溝を掘削していると考えられる。

ト部委員

- ・ 同感である。沢状の地形で水はけがいいから溝を掘ったのかと想定できる。

橋本副委員長

- ・ SD1456 の断面中層に見える白色土は、砂もしくはテフラか。

ト部委員

- ・ 白色土は粘土の破片であり、自然堆積ではない。環濠などは、自然に何回か土砂が流れ込んで埋まった状況であったが、この溝はブロック状のボソボソとした土が覆土の全体的に見られるので、人為的に埋め戻されたと考えられる。
- ・ 白色土で土層区分を行えば出来なくもないが、無理に自然堆積のようなラインを入れない方がよい。

小島委員

- ・ SD1456 の遺物は、炭化物が多量に含まれる上層にだけ出土しており、下層からは確認されていない。埋没の最後段階だけに遺物が入っているので、時期を含めて検討しなければならない。
- ・ 遺跡が削平されているので、確認された遺構が全て同じ時期というわけではない。
- ・ SD1456 の底には、砂層が確認されず水が流れた痕跡がない。
- ・ SK1452 も同じようなブロック状の土層であった。

ト部委員

- ・ SD1456 や SK1452 の覆土の状況は、埋め土であり、不要になると埋めるということか。
- ・ 埋め土から遺物が出土することは、埋める時に巻き込んだのか、埋めた後にその場所の土が沈んだのかということが考えられる。

橋本副委員長

- ・ 私が調査した栃木県古墳時代前期の居館の例では、土塁・堀・柵列が確認されていて、堀の覆土の状況から土塁が外側にあったと考えられる。
- ・ SD1456 の堆積状況から、土塁があったとするならどちら側で、柵列などが見つかるか。

事務局

- ・ SD1456 の土層堆積状況では土塁の存在は確認されておらず、溝跡周辺に柵列は確認されていない。

小島委員

- ・ 平成 17 年に 1 号環濠の調査を行った時には、外側から土が堆積したことが分かっている。2・3 号環濠ではそういった状況は見られない。

事務局

- ・ 現地にて 2C89 グリッドの調査状況の説明。

滝沢オブザーバー

- ・ 平面図で表現されているピットは、南西―北東軸でそろっているように見える。
- ・ 釜蓋遺跡に竪穴建物跡以外の建物跡の有無が課題であるので、確認されているピットが他の建物跡の柱穴の可能性があり、調査行うべきである。

岡村委員長

- ・ ピットの覆土が似ていれば、関連する遺構なので、位置関係と覆土の検討を行い、一部半截しなければならない。
- ・ ここの遺跡は、掘立柱建物跡の有無が遺跡の性格を考える上で非常に大きい要素である。
- ・ 今までも掘立柱建物跡の確認が課題としてあった。北側の掘立柱建物跡としていたものも、

柱穴が非常に小さく、同時代であるのか疑わしいというのが現状である。

小島委員

- ・ いつの時代のピットであるのか把握しなければ、平面図のみが将来に残るだけなので、一部は掘るべきである。弥生時代のピットと決まっているわけではない。

ガイダンス施設にて会議のまとめ

橋本副委員長

- ・ SI1455 に関しては、全掘しないで現状のセクションを活用して構造を明らかにするなど案が出ている。
- ・ SI83 との比較ということだが、火処の有無が問題となるので、SI1455 では柱穴や火処の有無を確認し、建物跡の構造を明らかにする必要がある。
- ・ SI1455 の中央に焼土が確認されていない範囲の状況は、一般的な焼失建物跡の焼土の検出状況と一致する。
- ・ 壁際の壁柱穴がまわる状況ではないので、壁立式建物の可能性は低い。

岡村委員長

- ・ 釜蓋遺跡で焼失堅穴建物跡が何棟確認されていて、どういう状況が確認されているのか。

事務局

- ・ 環濠内北部で2棟、張出部で今回のものを合わせて2棟を確認している状況だが、その中で堅穴内部の構造が把握できているものがSI83に限られる。
- ・ SI83 では、支柱穴は4本確認されているが、炉にあたる場所は攪乱で壊されている状況であった。

岡村委員長

- ・ 橋本副委員長の指摘事項も念頭において、調査範囲を正確に堅穴の1/4のではなく、炉跡の確認も十分できるように調査を進めること。

黒野委員

- ・ 以前、SI83 では炭化米が多量に確認されており、今回はSX1453で1粒確認されているとのことだが、一緒に出土するものが分かれば堅穴建物跡の機能や焼失の理由も見えてくる可能性がある。

岡村委員長)

- ・ 今回の炭化米の確認状況は。

事務局

- ・ 目視で確認した。炭化米が出土したSX1453の覆土は保管しており、水洗選別を定量行い微細な遺物の確認も行いたい。

岡村委員長

- ・ 関連して SX1453 に焼けた木片が入っていて建築物の一部の可能性はある。
- ・ SX1453 の炭化物は、屋根が焼け落ちた時に周辺に広がった炭化物が周溝に入るといったことや、火事場片づけをしたものを溝に入れることも考えられる。
- ・ 炭化材は 1 cm 角のサンプルがあれば樹種同定が可能である。

五百川委員

- ・ ぜひ炭化材の樹種同定を行ってほしい。
- ・ SI1455 は 3 号環濠に近い位置にあるが、環濠の近くに住居を作るものなのか。環濠と住居に距離の規則性はあるのか。
- ・ 3 号環濠と堅穴の時代関係はどうか。

事務局

- ・ 3 号環濠の手前で SI1455 の周溝がまわると想定している。環濠に周溝が接続することもありうるが、現状では 3 号環濠との関係性は不明。
- ・ 土器編年では 3 号環濠と SI1455 や周溝は同じ時期である。

橋本副委員長

- ・ 古墳時代の豪族居館の場合、堀から柵列まで 1.5～1.8m 離れていて、その内側に土塁があった可能性がある。そうした施設のさらに内側に堅穴建物跡が確認されている。

岡村委員長

- ・ 滋賀県守山市の事例だと環濠の近くに堅穴建物跡があった。そういう視点は重要で、堅穴建物跡と環濠の位置関係、環濠にバッファゾーンがあるのかどうか検討しながら調査を進めてほしい。

ト部委員

- ・ 環濠を以前見たときは、水を引き入れていて人工に掘っているが、川のようにしている印象であり、埋まり方も流水によって埋まった状況であった。
- ・ 今日現地を見たものは、周溝も含めてブロックが入る土層なので埋め戻した土である。セクション図を描く時には自然堆積のようなラインの書き方にならないようにすること。遺構のセクションについては、埋められたという視点で検討してほしい。
- ・ 大きい環濠は自然に埋まるが、SD1456 や堅穴建物跡などは、不要になったらすぐに埋めるということをしているとも考えられる。
- ・ 溝の規模が埋めやすそうなので埋めた、周りに発生土が出たので埋めたなど埋める要因もいろいろ存在するのではないか。

岡村委員長

- ・ 平成 21 年度には、SD79 で土壌構造をレントゲンで撮影をして分析も行っている。どのように機能して埋もれたのかを踏まえて、ト部委員の堆積学的な視点も参考にしてセク

ションの再検討を行うこと。

- ・ SD1456 はなぜここ位置し、どのような機能があったのか、いつ埋められて、掘りなおされていたのか、溝の歴史があるので、その視点を考えて検討してほしい。
- ・ SD1456 は 1～3 号環濠との埋まり方の比較も行い、機能や埋められ方が想定できる。
- ・ 3 号環濠との底面高の比較や溝底の堆積物などに注意して調査を進めてほしい。

滝沢オブザーバー

- ・ 今まで釜蓋遺跡で見ついている竪穴建物跡の平面形は隅丸方形であったが、SI1455 の平面形は方形なので新潟シンポ編年 4・5 期にみられる竪穴建物跡と形状が一致する。
- ・ SI83 の調査結果を念頭に置いて調査を進めてほしい。
- ・ 釜蓋遺跡の調査は見せる調査とされているが、どれくらい見学者が日々訪れているのか。
- ・ 広く広報して現地堅学会を行い、公開してほしい。

事務局

- ・ 現地を見学している方の数は把握していない。
- ・ 現地見学会は調査の進捗と合わせながら検討したい。
- ・ ガイダンスで定期講座を実施しており、その中で発掘調査速報を行い、多くの方々に情報発信をしていく。

川村オブザーバー

- ・ 10 年間調査を見てきたが、木（個別結果）はたくさん見せてもらえるが、いつになったら森（全体像）が見えてくるのか、それ自体が謎なので興味深く関わっている。
- ・ 出土遺物などでその機能が見えてくるが、木（個別結果）は見せていただいたが、どのような木か説明を受けていない。その辺が林になれば、森が見えてくるのかと思う。
- ・ 五百川委員指摘の環濠と竪穴建物跡の関係は、住居の場合であって、住居ではなく別の機能の建物の可能性がある。

岡村委員長

- ・ 竪穴建物跡も一律に見るのではなく、掘立柱建物跡などの建物やほかの施設も視野に入れて、その構成を明らかにすることによって釜蓋遺跡の性格が分かる。

(2) その他

次回委員会について

事務局

- ・ 後期の調査を 9 月から 10 月に予定している。それに合わせて、現場の進捗状況を見ながら調査指導委員会を開催したいと考えている。